

名見圖全

卷三



高見順全集 第三卷

定價二五〇圓

昭和四十五年二月十五日印刷
昭和四十五年二月二十五日發行

著 者 高 見 順

發 行 者 井 村 壽 二

印 刷 者 山 田 博

發 行 所 勁 草 書 房

(株式會社大和出版部)

東京都千代田區神田駿河臺一ノ三

電話東京二九四(六二二一)

振替東京一七五二五三

◎高見順一九七〇

〔〇三九三三八三三一八三六〕



高見順全集 第三卷

編纂委員

川端康成

伊藤整

澁川驍

平野謙

中村眞一郎

小田切進

目次

或る魂の告白

わが胸の底のここには
風吹けば風吹くがまま

深淵

深淵

深夜

密室

轉向

解説
平野謙
解題

或る魂の告白

わが胸の底のここには

「或る魂の告白」第一部

わが胸の底のここには
言ひがたき秘密住めり

藤村

その一 — 私に於ける恥の役割について

私は四十に成つた。

まだ私は四十である——と言ふべきかもしれないのだが、
そして私にしても左様に言ひたい想ひの切なるものがあるに
も拘らず、四十の私の心身には早くも私の嘗つて豫期しなかつた老衰の翳がさしはじめた。あの忌はしい肉體と精神の衰滅が突如、そして潮の退くやうに刻々と、容赦なく、私のう

ちを感じられはじめた。嗚呼、私はまだ四十だといふのに……。

老いといへば、戦時のあのざわめきの中で私は、——もし戦ひの濟む迄生き延びることが許されたならば、これまで果し得なかつた人生への借財ともいふべき自らの文學上の制作を、戦後こそ改々として、悔いの残らぬやうに營々と爲し遂げて、さうして老年の靜寂と孤獨とを待ちたい、一應爲すべきは爲したとする心豊かなそれらでなく、諦めの上のそれらであつても、とにかくそれらを持ちたいと、どんなに願つたことだらう。だが、ただいま私の上に、落日の儚なさと確かさで迫つてきたものは、左様な老年でなく、呪はしい挫折感に貫かれた突然の老衰なのである。四十にして既に老衰とはなんといふ滑稽さであるか。なんといふ惨めさであるか。喜劇は常に悲劇である。

私には、もはやあらゆる意味の情熱が失はれた。老衰の、これが證據でなくてなんだらう。情熱は、生命のもつと素朴な自然なあらはれとでも言ひたいあの植物と同じく、その伸びんとする芽が摘まれば摘まれるほど、いよいよ強く伸びんとする力を内に蓄へ、かくてその力の現はし方も亦、放埒を抑へた端正の美しさを持ちうるといふものだが、しかしあまりにも無慙に、またあまりにもしばしばその葉を奪はれその枝を折られつづけた植物は遂に生きる力そのものをも摘

みとられて空しく枯れねばならぬのと同じく、私の情熱も、壯年の正にその爛熟期に當つて早くも萎えた。私は主として精神の情熱を言つてゐるのだが、その情熱の萎えを、しかしながら、十年前の私のやうに（嗚呼、なんと！）情熱に燃え立つた私であつたことか。ことごとく「現實」のせゐにすることが、今の私には出来難い。それも私の老衰の故か。

若い日の私は、自らの愚行をすら「悪しき時代」の責任と爲して、自らは恬として恥ぢず、ひたすら「現實」を糾弾したものだつたが、今の私は、左様な私を、左様な考へ方を恥ぢるのである。さりとて、何もかも自分のせゐだ、自分の責任だとは言へないだらうが、そしてそれは、何もかも自分のせゐではないとする卑劣さとともに唾棄すべき、傲慢の一種といふものだらうが、——生きんとする芽を理不盡に摘む時代の暴力も悪なら、摘まれるがままに摘まれる己れの無力もまた悪だつたとしたい、さういふ今の私である。嘗つての私や私たちの口によくのぼつた力關係といふ言葉をここに持ち出せば、悪を跳梁させたについては力關係の點でこちらの無力にも責任がある。即ち無力も悪だつたと私は項垂れる。さうした私からすると、悪をただもう己れの外に見出して、猿のごとくいきり立つてゐる、さうした憎悪が、今日のもつとも代表的な情熱であるかの如くに思はれるのは、——（いや、いつの世にもさうかもしれないが）——この上なく哀し

いのである。憎悪が人間のもつとも代表的な情熱に成つてゐるといふことを哀しく憎悪する私は、もし私にいくらかの情熱が残されてゐるとすると、それは己れへの憎悪といふもののうちに、ささやかながらその殘滓が見出されると感じなくてはならぬ。

何故、かやうなことを書くか。

私は、生きたいのである。まだ生きたいのである。四十にして減じるといふことから逃れたいのである。そのために、私は私のうちに残つてゐる情熱の火を掻き立てたい。そして生の情熱をも燃え上らせてこの奇怪な老衰から救はれたい。

そのために、私は己れを語らうと決意した。私は何者だらう？ 私はどんな人間だつたらう？（聖ピエトロの石段の上に坐して、かう呟いた五十歳のスタンダールの幸福さよ！）己れを語るといふことは、この私にあつては、憎悪すべき己れの過去を摘發するといふことに他ならぬ。さうして私は己れへの憎悪といふ形でからうじて残つてゐる情熱を掻き立てて、かくて生きんとする生命の火をも掻き立てたいのである。だが、それで私は、私を今にも壓し拉がうとしてゐる衰滅から逃れうるであらうか。さうだ、たとへ情熱の火を掻き立てても、それは丁度あの儂い燄の火が、ひよつとした風の吹き廻して再びぱつと景氣よく燃え立つことがあつても、それは一時で、それでもう金輪際、二度と燃え上ることのない

完全な灰に成つて了ふやうに、かへつて自らの衰滅の期を早めることに成りはせぬか。さうだ、たとへそんな焰であらうとも、私はもう一度心のなかに赤々とした焰を燃え上らせたい。さうして、もはや避け難い衰滅なら、潔くそのうちに身を沈めて行かう。

私はさきに如何に我慢強い植物でも絶えずその枝葉を撈り取られてゐたら、遂には枯れて了ふといふことを言つたが、その植物がもし亭々と聳えた力強い樹であつたなら、その枝葉をのこらず丹念に奪ひ去られるといふこともないだらうし、枝葉を取られて枯れるといふことも無い筈だ。すなはち私は弱い植物であつたのだ。私はまた特別に無力だつたのだ。思はぬ破滅もまた致し方のないことだと、さう思つて、破滅に身を沈めて行かう。

私は特別に無力だつた。無力なまま抵抗力を養はなかつたといふ意味で、また暴力が實際以上に普通の人以上に作用したといふ意味で、また暴力を誘ひ出すやうな無力さだつたといふ意味で、私は特別に醜惡でもあつた。

恥づかしい私の過去よ。

己れの過去を恥づかしい想ひなしでは回顧できないといふ人は、世に少くはないだらう。だが、その人の頑是ない幼時

までが、恥でびつしり充たされてゐるといふ人はまた世にさう多くはないだらう。私はその少い、——しかも主観的な羞恥感だけでなく、誰から見ても立派な（？）恥でその幼時が一種華々しく塗りつぶされてゐる稀な人間のひとりである。私の二十代から三十代に於ける恥は、思へば、すべて私の幼時の恥によつて養はれたものであつた。……

*

——麻布の竹谷町のとある狭い横丁の長屋の前に、長屋の子には似つかはしくない、前髪をのばしておかつぱにした、身なりもこざつぱりした見るからに脾弱さうな男の子がひとり、しよぼんと立つてゐる。横丁の向うでは、つんつるてんの汚い着物をきた子供たちが集つて、錦繪風の武者繪の張つてある圓形のメンコを順番に地面に叩きつけてゐる。その子供たちの仲間入りをするには、小学校前のそのおかつぱ髪の子はまだ齢がちひさいが、しかしせてその傍へ行つて面白さうなメンコ遊びを見たいとしてゐる顔だつた。でも同時に、敵の襲來を常に警戒し恐怖してゐる小さな動物の眼のやうなおどおどした表情で、決してその場を離れようとしなかつた。陽を家の背後に受けた、さむざむとした低い軒下を——。路地といった方が適當かもしれない狭いその道と直角に、

やや廣い道路があり、その先にまたこれと直角に、川に沿つて電車線路が走つてゐるのだが、丁度そこで、川の彎曲とともに曲つてゐるので、小さな電車がぶざまな救助網をガクンガクンと揺りながら通りすぎるたびに、車輪がキーと軋む。その音が、暮色の迫りはじめたその路地にまで何か悲しく響いてくる。ひとりぼつちの子供は、その音に耳を傾けてゐるやうな子供らしくない姿であつた。

その子供が私であつた。そのいぢけた子供が……。

女のやうなおかつば髪はれてゐた。私は近隣のガリガリ頭の男の子たちから嫌はれてゐた。勿論、後頭部は刈り上げてゐるのだが、前は女の子と同じであつた。健全といふことを大人と違つて強く純粹に愛するところの子供の精神は、男の子のくせに女の子みたいに前髪を垂れてゐる不健全さを許し難いものとして憎むのである。長屋の子らしくない生意氣なおしやれ頭として反感も唆つたのであらう。私はまた同じく子供であつたから、子供の健全な精神から自分のおかつば髪を憎み、そしておかつば髪のために私を、時に言葉や素振りだけでなく、暴力でもつて、寄つてたかつていぢめつける子供たちを、常に恐れてゐなくてはならなかつた。さうした私は、心までが、いくらか女の子のやうであつた。

もつと幼い頃の私は、女のやうな身なりをさせられてゐたのだ。私のおかつば髪はその名残りとも言ふべきものだつた。

かかる不健全な外形が幼い精神を、男とも女ともつかぬ風の懦弱なものにするのに如何に見事に役立つたことか。更にその幼い懦弱は、幼い肌に刻みつけられた傷が生涯その痕を残すやうに、いな、寧ろ肉體の成長とともに、如何に見事に私のうちに成長して行つたことか。しかしそのことで母親を咎めてはならぬ。

私の母親は、生きて行く上の唯一の心のたよりとしてゐた私を、しかも月足らずの誕生のため到底育つまいと言はれてゐたほど羸弱な私を、なんとしてでも育てあげたい、成人させたいといふ一心から、巷間に傳へられてゐた病魔除けの手段に縋つたのである。男の子を女の子のやうに見せかけて置くと、幼い子の生命をねらふ悪魔が軒先から覗いた時、女の子はつまらないと素通りするといふ迷信に、母親は一途に取り縋つたのだ。そんな母親は萬一私が悪魔に攫はれるやうなことがあつたら、それこそカッとして自分の生命を絶つたかもしれない。

そんな母親だつたのなら、——と人は、かう思ふかもしれない。私が、どうして私自身呪はしいものとしてゐたそのおかつば髪を普通の路地の子のやうなガリガリ頭に直してくれと、母親に哀訴なり抗議なりしなかつたのだらうと、さう人はいぶかしく思ふかもしれない。しかし私の幼い頃、母のよく

口にしてゐた「きびしい嫉」といふものを、ちよつとでも知つてゐる人だつたら、私が母親に向つて到底そんなことを言ひ出し得なかつたらうと察してくれるに違ひない。

「あなたは全く變つた子だつた」

後年、私が子の親に成つてもいい齡に無事に達したとき、幼時の私を知つてゐる人に會ふと、その人は言つた。

「おとなしいといふのか、我慢強いといふのか……」

右の人差指のコの字に曲る、字で言ふと下の鍵の角の上に、火のついたもぐさをちよこんと乗せて、そして幼い私は部屋の隅にちよこんと坐つて、ゴメンナサイ、ゴメンナサイと言つて泣いてゐたといふ。大粒の涙をぼろぼろこぼしながら、小さな子供がおとなしくお灸を据ゑられてゐる、——それにはその人は魂消たと言ふ。ちよつと手をはらへば、もぐさは取れるのに、まるで行でもしてゐるみたいに、お灸が幼い皮膚をじりじりと焼くのを我慢して、ただ言葉で、モウシマセンカラ、ゴメンナサイと母親の許しを願つてゐる。

「僕なんか、僕の子供時分なんか、お灸と聞いただけで、逆に大暴れに暴れたもんだ……」

私だつてはじめは暴れた。誰がああ痛いお灸を据ゑられるのを、——中氣の老人ぢやあるまいし、子供で好きなものがあるものか。しかしいくら暴れても、それでお灸から脱れられるといふ譯のものではなかつた。暴れれば暴れるほど、も

ぐさの量が大きく成る一方だつた。この子はこの頃どうしたのか、すつかり悪く成つた、親の言ふことをちつとも聞かない、さう言はれるだけだつた。もつと悪くなると大變だから、うんとこらしめておかないといけない。——それで、幼い頭は観念したのだ。どうせお灸を据ゑられねばならぬのなら、おとなしく据ゑられよう。

それに、ひとつはこんなことがあつたからだ。ことごとくに叱られ折檻されるので、絶望的な反抗の態度に出た時のことだが、その爲一層ひどい折檻を受けなくてはならなくなり、今はそれがどういふ折檻だつたかは覺えてないけれど、私の泣き聲が長屋の人々の聞くに堪へない悲鳴に近いものだつたのだらう。近所の店子の依頼でか、大通りに面した、路地の角に住んでゐた大家さんが、私の家へ飛んで来て、

「まあ、まあ、お母さん。もういい加減にして……」

すると母が言つた

「親が子供を折檻するんですから……。それに母親ひとり子ひとりの大事な子だからこそ折檻するんですから……」

私はそのとき、救ひの手を差しのべられて、ほつとした氣持より、狂亂に近い母親のありさまを他人に見られることが、その母親の子として恥づかしい、大家さんに恥づかしくて堪らない、そんな氣持だつたことをありありと覺えてゐる。或は小學校にもう入つてからのことかもしれないが、とにかく

まだほんの子供なのに、そんな子供らしくない氣持だつたことを今もなほ覚えてゐる。そんな子供らしくない氣持だつたからこそ、忘れられないのだ。

このやうに、羞恥に對しては極めて幼い頃から極めて敏感な、——異常なほど敏感な私であつた。恥に充たされたせゐだらうか。恥の記憶がまた異常なほど根強く深刻なのだが、従つて過去を回顧する場合、他の記憶が全くといつていい位、曖昧なのはわれながら驚くほどののに、恥の記憶のみは夏雲のごとくに壯大に湧き起り、かくて過去の私を語るといふことは、私の恥の記憶を書くといふことに成るのも、自然の理^{ことば}といふものである。……

「あなたのお母さんは、しかし、きびしかつたな」

お灸の話をした人は、つづけてそんなことを言つた。同情されて私は恥で（ここでもまた！）顔を赧^{かへ}らめ、

「——これ」

と人差指を、まるで盜賊の符號のやうな形にしてその人の前に突き出して、己れの羞恥をごまかした。

「ここに、お灸の跡が、ほれ、こんなに歴然と残つてゐます」

さう言つて笑ふと、その鼻の奥にあたつて、あのもぐさの焼ける臭ひがまざまざと蘇つた。それは何か懐しかつた。

——一度か二度で出来た生やさしい跡ではなかつた。

——話が横道に逸れてばかりゐるのを氣にしないではないが、二十代の中頃、私とその頃同じ年齢の者なら大方知らない者はないと言つていいあの「豚箱」といふ奴に、私も馴染の淺くない方だつた。そのひとつとして、大森の警察署の留置場に百日近く入れられてゐたことがあつたが、取調べに監視廳からやつてきた、その時分「有名」だつた特高課の刑事は、私のそのお灸の跡のある指の間に鉛筆を入れて、

「さあ、言はねえか」

開いた指を締めるのだつたが、いやなんともいへない、全く不思議な位の痛さだつた。今は街頭で賣られてゐる「赤旗」——その頃は謄寫版の小型のものだつたが、焼き忘れたそれを家宅搜索で取られ、それでもつて責められた。いづれ私の回顧もその時期に到ること故、ここでは詳細は省くけれど、差し當つて必要なのは、

「柳に雪折れなしつてのは手前のことだ。しぶとい野郎だ」

表面はしをらしく然し^い強情に、知らぬ存ぜぬと自白を拒んでゐた私にさう刑事が言ふと、舌なめずりして新手の拷問に移つた時の思ひ出である。プロレタリア作家のT・Kを拷問で殺したといふ噂から「有名」だつたその刑事のその舌なめずりは、「犯人」を自白せしめるための餘儀ない手段としての拷問といふのでなく、拷問で苦しめるのを實は楽しんでゐるといふことを私に明瞭に告げた。さうした拷問によつ

て遂に私は自白させられたのだが、しかし「被害」をすぎさま他に及ぼさない程度には自白の時期をのびし得たといふのは「おとなしいといふのか、我慢強いといふのか」と人に奇怪視される私のある種の性質の爲であり、いはばその性質を私に齎らした幼時のきびしい折檻のおかげであつた。しかし折れない筈の柳が折れるのも亦、人間の性質を決定するその幼時に當つて私の養はれた我慢強さが我慢強さだけの我慢強さではない爲だつた。

實は私はここで、母のきびしい折檻には、子を生むとともに佗しいひとりとぐらしの境涯に落された女のヒステリーもたしかに加はつてゐたやうだ、——宛かもかの刑事の拷問の心理には、「犯人」を自白せしめる爲の拷問といふだけでないものがあつたのと同じく、と書かうと思つたのだが……。さういふ氣持もあつて、突然拷問の話に逸れたのであるが、いまその話を書いたあとでは刑事と母親とを、たとへ話にせよ、一緒にするのは、私を苦勞して育ててくれた母をいかに心なく傷つけるやうで、到底忍びないのである。子としてまたかかる親不孝は許されない氣がする。そんなたとへを、輕率に思ひ浮べたといふだけでも、罰當りの感じに、いまは苦しめられてゐる。……

「忠雄ちゃん」

古びた低い軒の下にひとりで佇んでゐた私は、家のなかから私を呼ぶ母親の聲を聞いた。

「はーい」

「もう家の中に入んなさい」

「はーい」

「もう寒いよ」

「はーい」

「風邪ひくといけないから入んなさい」

すると、この時、

「うえ、臭い、臭い」

通りがかりの男が大仰に顔を顰めて、連れの男に言つた。

「なんだらう、この臭ひは」

「納豆屋のむろがこの長屋の裏にあるんだ」

「ああ、あの表通りの……」

大家の絲屋さんの隣りに大きな納豆問屋があつた。私の家の裏に丁度そのむろがあつて、むろを開けると、あの納豆の酸酵した臭いにほひがあたり近所に遠慮會釋なく溢れ漂ふのであつた。

「よくこんな臭いところに住んでゐられるな」

「今はまだいいんだ。夏場は、それこそたまんねえぞ。夏は、だからこの道は通らねえことにしてゐる」

路地の先にある工場の職人だつたかもしれない。その邊の

記憶は無いが、この會話だけは、はつきりと覚えてゐる。幼

い私の頭に、熱い恥の想ひとともにくつきりと刻みつけられた、さう言ふ方が正確であらう。

その時、私は幾歳だったか、自分では分らないが、恐らくさうした言葉を私の前で放言しても、私の幼さでは侮辱として通じまいとさう私を無視できる、そんな幼さであつたのだらう。だが私にはその侮辱が、今もつて忘れないほどの、即ち生涯にわたつて消し難いほどの強さをもつて響いたのである。再び、だが、——まことに不思議なことには、死ぬまで忘れないほどの強烈な侮辱の因つてきたるそもその原因たる強烈な臭氣については、私は全然、記憶が無いのだ。そんな臭いところに住んでゐたのかと、頭を傾げる始末である。

その家に私は、それからその家の近くの小學校に入學し、そして卒業するまでずっと住んでゐたのであるが、臭氣に關しては、まるで覚えが無い。慣れて鼻がバカに成つてゐたのだらうか。しかし、とにかく「よくこんな臭いところに住んでゐられる」といふ言葉ほど、思へば、私の住んでゐたところの如何に陋巷であつたかを明確に、——殘酷なくらゐ明確に示すものは無い。

そんな臭い家のなかに、私の母親は日がな一日、坐りつけて安い賃仕事の裁縫をしてゐた。幼い私と老いたその母（私の祖母）を養ふために……。

かへるがなから

か——へろ

メンコ遊びの子供たちは、そんなことを口々に言つて、散りはじめた。貧しくとも父母の揃つたそれぞれの家へと歸つて行つた。

陋巷と、私は書いたが、これからして麻布の竹谷町をもつて陋巷の町と解されては、私は私の過去の約三分の一にわたる時期を見守つてゐてくれたその町の名譽を傷つける者と成るであらう。その頃、竹谷町及びその一帯は、一般的に言へば所謂山の手の屋敷町の部類に屬してゐた。そして屋敷と屋敷との間に、宛かも指の間の疥癬のやうに、見苦しい陋巷が發生してゐたのである。さうした事情は、さうした陋巷に住んでゐた幼い者に、下町の、どこまでも餘すところなく陋巷といつた町に住んでゐる者の恐らく知らない樂しみを與へてゐた。たとへば、大雨のあとなど、自分の家の前の溝でもつて、金魚や目高や鮎などが、まるで夢のやうに取れて、——ああ、どんなに樂しかつたことか。ああ、どんなに幼い私は出水を待つてゐたことか。

大概の屋敷には、池がある。池には必ず金魚や鮎がある。大雨があると池が溢れて、時には大きな鯉までが、喜びのすくない陋巷の私たちをまるでさうして喜ばせようとするかの